

それが、なんらかな感触を確かめながら、私は私の腕の中から、私が滑り落ちてゆくのをいつも恐れていた。私が分かることは、私の手がそれをを感じているということだけだ。それがそこにあるということではないのだ。まるで手がそれを感じるにつれて、その存在が私の心のいくつもにささ思われる。

私は彼女を強く抱きしめる。不在を抱えこむことを恐れながら。

触覚は、視覚と比べてより直接的である。視覚が対象との間に、つねに一定の距離を置かなければ成り立たないのに対して、触覚は対象との距離を取らない。触れ、込み込み、撫でたり、モノからモノへと伝達する皮膚はその皮膚で確かめ、表面の感触やその素材を了解し、大きさを感じ、重さを握る量感、その形態を察する。そのためには、大きさを感じることなく扱うことが可能で、例えは重さにしては、必ずしも筋肉を緊張させることなく、握り留めることができる。そんなことで過去の経験を参照することがあったとしても、経験の参照は決して重要なことはない。むしろ、今まさに触れて感じることによって、その後に、一瞬流れた経験はやがてこのままに流れじるという状態が触覚である。それでは直接的である。経験の参照は、その直接性に触発されて呼び覚まされた記憶なのであって、構造的な意味はどこで持たないのだ。

视觉障害者の作った塑像作品を観賞するとき、その形態の素晴らしさに私は驚かされる。見えないのに形が作られる、そのう朴朴な驚き、貴賎の気持ちは認められないが、つまりひきこみに見てしまつといふことは必ずしも否定し切れないことはあるが、その気持ちを差し引いても、その作品は私は感動を呼び起こす。その感動は、誤解を恐れずに言へば、作品に対する感動というより、作品を観賞することによって私自身の中で起きた変化に対する感動だといふのが正確であろう。

それはこういうことだ。作品を前にして、私は彼等が制作すると

と言つてしまひたいほどにその部分は大きく感じるのでだ。そして、触れる前に目で見た記憶は消失し、触れている事実だけが増大していくのだ。

その時、私の目は私の手に嫉妬を感じていた。

目はモノの表面の反射光を情報とする。つまり、モノそのものを見るのではなく、表面に当つて反射した光を見るのである。その意味で私は決してモノ自体を見ることはできないのだ。触覚がモノ自身に直接触れるのに対して、視覚はモノにある距離を保らながら間接的な情報でしか触れる事はできない。間接的な情報は解説することを求める。取扱選択を免げ、解説された情報は、「一つの概念として私達の前に立ち現れる」。視覚は瞬時に思考するのだ。それゆえ私は、直接モノに触れなくて、それを感じることは可能である。「つまりそのことを自分が代わりにするのである。目で触れるのではなく、表面に当つて反射した光を見るのである。」もちろんそれは、私達はこの凝集体験を享受している。時には、実際に触れたり、味わったり、匂いを嗅いだりするのも魅力的に感じることもある。しかし、他の感觉器官の分も目で体験するといふができるのだ。それはもちろん筋膜体体に過ぎないと言つことは可能だが、しかしそれにしても私達はこの凝集体験を享受している。一方で、その感覺官が行なったことによる身上に多く、素早く、想像力がそれを即座に理解するからだと言つてしまつてしまうのだ。これは視覚だからできるのであって、その逆のことが触覚にはできない。なぜなら触覚は、今まさに触れて感じているという直接性によって支えられているからなのだ。その直接性ゆえに、触覚はそこで一気に凝集してしまのだ。

そこで、一気に凝集してしまのだ。一方で、その感覺官が行なったことによって、その感覺官が即座に理解するのではなく、それが類似的な直接性に過ぎないと、それでも、その相似的な直接性を獲得すべく、モノの表面を見続けることになるのだ。そしてそれは筋膜体体であるからこそ、私達はそれを享受し楽しむことができるのだ。

直接モノに触れることができない目はモノの表面を淮い、決して見ぬるものではない。モノとの距離を淮めようとする。こうして見ることの快樂が生まれ、モノに到達しないことを密かに自覺しながら、それでもモノに到達することを見見る視覚は、その表面を淮り続けていく。解説するための情報収集を停止し、あるいはその不能に自ら陥ることによって、視覚は視覚を越え、抑制した欲望となる。見ることのエロシズム、表層のエロス。